



Title	中世の心
Author(s)	稲田, 繁夫
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 25, pp.一-六; 1976
Issue Date	1976-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/32458
Right	

This document is downloaded at: 2018-11-14T02:59:41Z

中世の心

稲田繁夫

一

最近海上自衛隊の飛行隊長をしている長男から、「日本文学を貫く思想的な、あるいは精神的な特質」といった主題で航空隊員に講演をしてくれと、司令の意を受けて依頼された。聴衆が聴衆であるから、折角部外者を講師に迎える以上、それによって隊員の士気を何等かの形で鼓舞することに役立たなければならぬであろうし、逆に士気を沈衰させることになってはいけぬであろう。直接的に士気を鼓舞する内容といえ、戦時中時局にこたえる国文学の資料として、たとえば「海ゆかば」などの和歌を挙げて、これが万葉集の精神であると説明する向きが多かったことを思い出すのである。

しかしながら、このような取り上げ方は、戦後、東国の人々の防人歌などを資料にして、九州防備の防人たちの真意は、強制された出で立ちよりも、妻子との別れの哀しみが凡てであったと説くことよって、万葉集の精神を語ろうとする切り換えも見られることになったのであって、そのような取り上げ方は、飛鳥時代から奈良時代に至る約四百年にわたり、上は天皇から下は無名の農民に至る広地域、多数の人々の、あらゆる感情生活の歌の集大成である万葉集の思想・精神の一斑を語るに過ぎないことになるであろう。

中世の心(稲田)

こういうことから思い起こすのは、恩師麻生磯次先生のご教訓である。

戦時中、先生は朝鮮総督府の視学委員を兼務しておられ、私の勤務校の国語科の授業視察にもお出でになられた。当時朝鮮では時局の要請にこたえて「皇国臣民の誓詞」が制定され、修身教科書の巻頭に掲載されるとともに、教育的な行事はいくまでもなく、全鮮を挙げてあらゆる団体行事には官民揃って斉唱した。三か条の短文からなり、内容の主旨は

一、国体明徴

二、内鮮一体

三、忍苦鍛練

の三項目から成っていて、学校の各教科の授業においても、この誓詞の三か条がどう徹底したかが追及された。本務の視学官の授業視察の場合には、算数科や理科の授業においてまで、国体明徴・内鮮一体の教育方針がどのように生かされるかが追及されるので、いきおい牽強附会な結びつけ方で授業が行われることもあったようである。

この点いわゆる国民科といわれた修身・国語・地理・歴史は誓詞の三か条と結びつけて授業をすすめるのには恰好の教科であった。たとえば国語科で俳句教材を扱うとき、教科書教材のほかに補充教材として

元日や一系の天子富士の山

などを読ませることによって、国体明徴を強調することができた。

ところが麻生先生は、このような授業をご覧になった後のご講評で、そのような短兵急な誓詞との結びつけ方は、俳句教材の本質的なものの享受を誤らせることになる。俳諧文学はその中を貫いている自然・人生の一体観とか、明・浄・直という鬼貫の「誠の俳諧、芭蕉の「風雅の誠」という精神が、日本民族の遠い祖先以来の民族精神であり、それは同時に文学精神である。それは廻れば「ますらをぶり」の文学精神であり、「もののははれ」の文学精神である。このような民族精神文学精神が世界における最短小詩型である俳句に凝精したのである。こういう民族精神、文学精神を俳句教材によって次代に受け継がせるのである。このことは戦時下、国民精神の涵養の一環をなすことができるであろうし、また、そのことは戦時下だけの要請にこたえるだけではなく、時代が変わろうと動かない不易のものである。と言われたのであるが、こういう認識に立って表題について講演することになった。

二

「中世の心」という表題は一般の聴衆には随分古い時代を問題にした、現代生活とは縁遠い話題と考えられるかも知れないが決してそうではない。日本中世の心は日本民族の心の古里である。現代の日本は物質生活はいうまでもなく、精神生活もアメリカナイズされ、更に革命勢力は総力を挙げて、今日の日本を解体しようとしている。

現在のように秩序を乱そうとする事件が多発する状況になった背景は、戦後一、二年、米ソ冷戦の世界構造になるまでの占領政策に根源的な原因がある。占領初期はアメリカを始め連合国にとって将来脅威にならない国に作り変えることが日本占領の目的であった。そのため、占領政策の柱は完全非軍事化と精神的非武装化、つまり日本人の精神的な解体をねらったのである。この目的達成のため、陸海軍の完全解体が命ぜられたが、これは近代世界戦史上珍しい例であり、次に日本国家の歴史の断絶がはかられた。歴史を断絶させることは民族生命を滅亡させるために最も良い手段であり、これが占領政策の基本であった。歴史の断絶をはかるために、家族制度、教育制度を変革の対象としたが、多くの国はこうした変革には大きな抵抗があるのに、日本の官民は双手を挙げ日本民族滅亡政策に賛成した。これも世界史上珍しい現象である。そうした占領政策遂行の中で、戦略的に、日本の精神的非武装化の精神で新憲法が作られた。日本の憲法は日本民族の価値観をその根底に含むものでなければならず、長い日本民族の歴史・伝統に立った民族の生き方、政治生活の表現であって、深く現在・将来の日本民族の価値観を鼓舞激励すべきものでなければならぬ。憲法は国体法と政体法から成り立つものであるはずであるが、日本国憲法においては国体法に関するものが不十分であり、天皇の憲法上の地位にしても歴史と伝統がない。今日価値観の多様性ということがいわれるが、価値を等価値的に並列的にとらえるのではなく、何が日本民族の歴史と伝統に立ってより高い価値であるかが位置づけられていかなければならないのである。

三

前述したように、日本中世の心は日本民族の心の古里であると述べた。日本民族の建国精神、国家観、民族精神は奈良時代以前から形成発展してきたことは言うまでもない。万世一系の皇統を戴くとか、八紘一字の世界観などの上代民族精神と「ますらを振り」の「清明」心、つまり「まこと」の文学精神とは未分化の全体として継承されてきた。^{註⑥}

「ものあはれ」の美意識は—仏教の影響を受けながら、「まこと」の文学精神の発展深化として成立してきたのである。「もの」とは物的精神的未分化の対象をいい、物に生命をみとめ、「あはれ」と感ずる。一切衆生悉有仏性、草木国土悉皆成仏と願う願作仏心——仏にならんと願う心、本願の心に写る一如の世界である。曾我量深先生は現美の世界を深く見つめると、本願により莊嚴された生命の世界であり、それは浄土ともいわれる。こういう世界を純粋に感ずる心が純粋感情といわれるのであって、「ものあはれ」と願作仏心と純粹感情とは三位一体であるといわれる。^{註⑦}

中世に入り日本民族の精神文化・芸術美意識はいよいよ深化してきた。「ものあはれ」の美意識はその深化の上に「幽玄」美の発見、更に「さび・冷え・やせ・からび・水味・無文」などの、いわゆる老境美にまで深まっていた。それは東洋的な、さらに日本的な芸術美の窮極である。ただに日本的なものとしてだけでなく、世界における美意識の極限に到達したものととして、世界の芸術家・芸術評論家が讃辞を惜しまぬところである。戦後派の日本人はアメリカイナズマされて、一般には気づかぬ者が多い

中世の心（稲田）

が、若い人々を含めて日本人の心の底に地下水のように脈々と流れている精神文化・芸術美意識の伝統があるのである。

(A) 今、色彩に対する中世の価値観を取りあげてみると、艶とか妖艶なる美といわれる新古今集においても、あらゆる色の多様な組み合わせの美に心を向けたのではない。

山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水

卷一 式子内親王

うすくこき野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消

卷一 宮内卿

みよし野の高嶺の桜散りにけり嵐も白き春のあけぼの

卷二 太上天皇

くれて行く春の湊は知らねども霞におつる宇治の柴舟

卷二 寂蓮法師

一首目、二首目は色とりどりの百花満開の春の盛りとは違った、残雪の寂しい山家や、雪消えたばかりの野辺の若葉に春の美をみつけており、三首目は白一色のいわゆる遠白体の美である。長明無名抄において俊恵はこの歌を例歌に挙げているのでなく、詞花集に選ばれた寛治八年高陽院七首歌合の大江匡房の

白雲と見ゆるにしるし三吉野の吉野の花ざかりかも

を、「これこそは、よき歌の本とは覚え侍れ、させる秀句もなく、飾れる詞もなければ、姿うるはしく、清げにいい下して、長く遠白き也。たとへば、白き色の異なる匂ひもなければ、諸々の色に優れたるが如し。万の事極まりてかしこきは、淡くすまじき也。」

といて、ここでいう白色は単純白色をさすのではなく、あらゆる色をこきませた挙句に出てくる「白き色」である。四首目も字

治川を下る柴舟を包みこんでいく晚霞の色は淡い白である。

幼年時代から青年時代には、衣服は原色や多彩な色どりが似合い、また好むものであるが、やがて年を取るに従ってじみな色となり、ついには滯い色や淡い色になっていく。あらゆる色を経験し尽くして到達する色彩への価値付けがこのような色であったのである。中世においては色彩に対する価値づけの年令的発達段階が考えられたのである。学校の理科室に色彩の回転板というのがあり、円板に放射線状に多くの色が塗られていて、これを回転させると灰白色に見えてくる。こういう灰白色は単色としての白ではなくて、あらゆる色を内に含んだ色であり、それに最も高次の色彩価値を見つけたのである。俊恵がこのような白さを「白き色の異なる勾ひもなければ、諸々の色に優れたが如し」といい、「極まりてかしこき(色)は、淡くすさまじき也」つまり淡白である。濃厚な色彩を期待するものにとっては、特に面白みがないものだというのである。詠歌においてはこのような体の表現は至高の芸境に到達しないと容易に出来ないもので、「この体は易きやうにて極めて難し。一文字も違ひなば怪しの腰折れに成りぬべし。如何にも境に至らずしては詠み難きさまなり。」といい、あらゆる色彩の美を知りつくして、ついに見付け出されてくる色彩の極致である。アメリカ人や西洋人が相当の年輩になっても原色の衣服をつけ、ビルマ人の年輩の僧侶などでも、黄色や緑色一色の僧衣を着ているようであるが、中世の人々に言わせると、色彩に対する精神年令が遅れていると見るのである。最近の男の大学生がこのような原色のものを着用するのをしばしば見かけるが、時代の流行ではあるが、色彩に対する価値観の年令的発達の上からは、低い段階にあるといわなければならないであろう。

連歌師心敬は「淡さ」の美を更に深化させて、「冷えたる・瘦せたる・寒く・さびたる・凍りたる・からびたる」美の世界、いわゆる老境美に到達した。これは心敬に限らず、中世芸術人を通じていえることで、連歌師頓阿は至極体とか極真の体といい、あらゆる美の至極の姿として位置づけられており、宗祇においても同様であった。

塚に入り果てたる——ふけさびたる方、最尊なるべし。(心敬——老のくりごと)

心は太く、欲心を構へ、あたたかなるあてがひにて——しみ凍りもせず。(心敬僧都庭訓)

と至高の芸位に到達し果てたところに「ふけさびたる」極真の美が位置づけられ、これと反対に、財に富みぬくぬくとした態度で対象に接するような表現はじんと胸に感じることはないというのである。心敬のいう美は、

氷ばかり艶なるはなし。(ささめごと)

水精の物に瑠璃を盛りたるやうに清く寒かれ。(同)

と、「清く寒く」感ずる美に昇華したのである。かすかなる所に心をかけ給ふべし。一重白梅の、竹の中より咲き出で、雲間の月を見る如くなる句が面白く候。八重紅梅の咲き乱れたる末を切り詰め、八月十五夜の月などやうなるは好ましくらず候。(心敬僧都庭訓)

と、人工的な剪定を加えた紅梅に満月をあしらう美ではなく、雲間の月の下、竹藪の透間からの一枝の一重白梅の「かすかなる」美に心を向けたのである。徒然草で

花は盛りに月は隅なきをのみ見るものかは、——散りしをれたる庭などこそ見所多けれ、望月の隅なきを、千里の外まで眺め

たるよりも、たれ込めて月の行衛知らぬを——

という月・花の美が高く価値づけられていたことと通ずる美の世界で、現代においても日本における美の伝統として、場と機会と年令的発達段階に応じてよみがえってくるものであろう。

(B) 次に、味についての中世における価値観について取りあげらる。一般に若い時代は複雑豊富な味を好む。単純な味より複雑な味に最高の価値づけをするなら、中華料理などは最高の味であろう。ところが年輩になると、湯豆腐の味・お茶づけの味のよさが見付けられてくる。湯豆腐の味・お茶づけの味も、色彩における「淡い白さ」の場合と同様に、味覚の年令的発達段階における低い段階として価値づけられるのではなく、あらゆる味をなめ尽くして到達する、食道楽・食通の極限の味として位置づけるのである。日本人の味覚は鋭敏で繊細な味の識別をするのであるが、これは茶道に結びつくことによって中世から発達してきたものであろう。それは根源的には、キッコーマン醬油註⑤の歴史の中で実践されているように、「モロミを検査するときは、自然に頭が下がる。」
「コウジ菌は生命をもっているだけでなく神註⑥造物主である。人が微生物に奉仕し、そのおこぼれを頂戴する精神に徹することこそ、しようゆづくりの理念である。」という中世仏教における自然法爾の法則に根ざすものと思われる。こういう自然の生命、ものの生命を感得するところに、純にして生命あるものの本来の味が生まれ、その味が味わわれてくるのである。ものの生命の自然の味を味わうことによって、感覚・感情が純粋にさせられ、感覚・感情の純粋な人を、いわば仏といい、そういう世界を浄土という。舌の問題は浄土の問題・純粋な世界の問題にかかわるといえるのである。今日薬品の調味料や食品によって、舌の感覚が衰

えてきているが、それは肉体も駄目になり、更には人間に大切な感覚とか感情が駄目になり、ついには世界が駄目になるに至るであろう。役者の坂東三津五郎は弟子たちに、「即席ラーメンを食べるな。インスタントを食べるな。舌が駄目になる。舌が駄目になると芸が駄目になる」と教えられたそうであるが、心身一如で、人間経験の先端である耳や舌が純粋になることによって、人間の身体が精神が環境・世界が純粋になるのである。註⑥

心敬は連歌の理想を語りながら純粋にして最高の味についてのべて、

無上の良き連歌といふは、湯水などを飲む如くなり。させる味はひなけれども、いつ聞くも飽かぬものなり。珍らしきことは、うち聞くに面白けれど、やがてさむるものなり。(さざめごと)

げにも水ほど感情深く清涼なるものなし。(同)このように、あらゆる味をなめ尽くし、知り尽くして到達する味の極限として、最も純粋な自然本然の味として湯水の味、清涼なる水の味に行きつき、「無味・水味」という淡々とした味わいを最高のものとしたのである。

このような色彩観や味覚観、その根底としての美意識は中世におけるあらゆる芸術に浸透していて、能楽において「風姿花伝」の初期においては「幽玄」の美は優にやさしく・美しく華やかなものであったが、年令的成長によって消えて行くならば、それらは「声の花」「身の花」であって、「時分の花」つまり身体的盛りの一時期の花に過ぎないものであって、老令に至っても残る「誠の花」の芸境は、「冷え・さび」たものが究極的な至高な美として位置づけられ、その深化の上に禅竹の能の世界があるので

ある。世阿弥は演能の成功する様相を三つの発達段階で説明し、

- 一、見けんより出でくる能
- 二、聞もんより出でくる能
- 三、心しんより出でくる能

無上の上手の申楽に、物数の後、二曲も物真似も、ぎりも、さして無き能のさびさびとしたりする中に、何とやらん感心のある所あり。これを冷えたる曲とも申すなり。この位、良き程の目利きも見知らぬなり。まして田舎目利きなどは思ひもよるまじきなり。これはただ無上の上手の得たる瑞風かとおぼえたり。これを心より出でくる能ともいひ、無心の能とも、また無文の能とも申すなり。(花鏡)

と云って、真の極意に達した能者の能は「無心無文、冷えたる曲」になり、それは、「無上の上手の得たる瑞風」であるといふのである。

以上のような中世における美の価値観とその年令的な深化は、その美的価値創造の根底に、心の在り方が問題にされておる。中世人においては、芸術美の創造が同時に芸術人自身の心の修行であった。そして芸術の創造ということは、窮極には自己自身の人間完成のきびしい営みであった。そのためには「まごころ」が強く要請された。それは溯ると、「もののはれ」の精神であり、更に溯れば「清明心」であり、実に日本民族の精神生活を貫通するものである。俊成・定家が歌道のために住吉明神に祈念したり、正徹が仏道・歌道の一如の世界を拓いたのも、「まごころ・まごころ」の起点からであった。心敬の「心の艶」の世界は、まごころのもつ美しさであって、

此の道に入らん輩は、まづ艶を旨として修行すべきことといへ

り。艶といへばとて、ひたすらに句の姿・詞のやさばみ、花めきたるにはあるべからず。胸の内清く、人間の色欲うすく、よろづにあはれ深く、物ごとに跡なきことを思ひしめ、人の情けを忘れず、その人の恩には、一つの命をも軽く思ひ侍らん人の胸より出でたる句なるべし。(さざめごと)

という心から歌・連歌は生まれてくるものである。「芸道」理念の確立したのは正徹においてであるが、高く精神的な理想を仰ぎ、先学先達の伝統を継承し、定家という鏤骨彫心の刻苦による年劫を積んで、初心から至高の芸位に至る中に、芸術と自己完成が果たされていくのである。世阿弥が風姿花伝序で、好色、博奕、大酒を三重戒と戒め、それはまた世阿弥一人のものでなく、父祖の伝統であった。また、「評議なかれ」といって、自分勝手な慢心から生ずる争い心を戒めたのは、歎異抄第十二条の「評論」を戒められたことと通ずるもので、このような中世芸術人たちの生き方は、日本民族のすぐれた歴史・伝統である。戦後自己を現在に在らしめた歴史から遮断されてきたが、現代日本文化の諸様式に、中世的なものが根深く貫いているのである。われわれは中世の心の継承と発展の上に、真に日本人になるといいたい。このような歴史に目をさまし、歴史に対する謙虚な姿勢が、新しい歴史を生み、新しい世界を拓いていくことができるのである。

注① 教育月報 第一四四号 福田信之・現代技術文明と教育(中)

② 同 第一三一号 小森義峯・天皇と憲法・わが国体法(上)

③ 久松潜一・日本文学評論史 古代篇

④ 願海第二巻第九号 高原覚正・大地の発見

⑤ キッコマンの経宮(読売新聞社)

⑥ ④の「ここに生きているもの」仏教の自然法爾とキッコマンのピニア・アンド・ナチュラル